

Contents

- 1 大学博物館等協議会 2014 年度 大会・第 9 回博物科学会開催報告
愛媛大学ミュージアム 准教授 吉富博之
- 3 愛媛大学ミュージアムのみせ方・考え方
愛媛大学ミュージアム 准教授 徳田明仁
- 5 愛媛大学ミュージアムにおける学生スタッフ
愛媛大学ミュージアム 准教授 吉田広
- 7 北海道大学総合博物館の展示の変遷—展示というメディアを大学に根づかせる—
北海道大学総合博物館 副館長・教授 大原昌宏
- 10 キャンパス内外に分散する施設を活用した大学ミュージアム活動の事例
島根大学ミュージアム 准教授 会下和宏
- 12 山口大学における学術資産継承の取り組み—事業成果展『宝山の一角』開催中—
山口大学人文学部 准教授 尾崎千佳・山口大学埋蔵文化財資料館 助教 横山成己
- 14 大学博物館等協議会加盟館の活動状況
東京藝術大学大学美術館 名古屋大学博物館 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

大学博物館等協議会 2014 年度大会・ 第 9 回博物科学会開催報告

愛媛大学ミュージアム
准教授 吉富博之

大学博物館等協議会 2014 年度大会および第 9 回博物科学会が 2014 年 6 月 19 日（木）・20 日（金）に、愛媛大学で開催された。参加館は 29 館で参加人数は 103 名（オブザーバー 4 名を含む）であった。

初日の協議会では、実行委員長（弓削俊洋

愛媛大学ミュージアム館長）の挨拶に始まり、文部科学省研究振興局学術機関課の高橋亮係長より学術研究をとりまく動向について、特に予算状況などについて紹介を頂いた。

続いて、協議会のシンポジウム「大学博物館のみせ方、みられ方」と題して、特別講演 1 題と講演 3 題の発表があった。まずは、柳澤康信愛媛大学長より「大学博物館の存在意義—愛媛大学ミュージアムの実践と課題—」と



会場の様子



シンポジウムの様子



博物学会の口頭発表の様子



ポスター発表会場の様子



学生スタッフによるガイドの様子



懇親会の様子

題した特別講演があり、愛媛大学ミュージアム設置準備委員会の委員長を務めたご自身の経験から同博物館が目指す方向性と現状についての報告があった。次に、愛媛大学、北海道大学、島根大学から、展示での「見せる」こと、社会や学内から「見られる」ことについての事例報告があった。博物館の規模や環境、目的などが異なる3館の報告は、たいへん個性的で方向性が異なるものの様々な創意工夫の事例紹介からは得るものが多かったと思う。

館長会議と実務者会議の後に、協議会総会と博物学会総会が開催された。

総会終了後、愛媛大学生協食堂にて懇親会が開催された。来年度の開催校である金沢大学資料館の奥野正幸館長からの挨拶もあった。懇親会終了後は、市内繁華街に移動して二次会も開かれたと聞く。

2日目は、博物学会の研究発表が行われ、口頭発表は午前中に7題、午後に7題であった。博物館を通した学生や地域の社会教育に関することと、学芸員資格取得の新課程移行

に関するなどが、今年度の発表では目に付いた。ポスター発表は11題で、口頭発表会場のすぐ横の廊下で行われ、各館の紹介ポスターと共に並ぶ様は壮観であった。ポスターの前では参加者による活発な意見交換が行われていた。また、お昼休みを利用して愛媛大学ミュージアムの見学ツアーも行われた。既に見学を終えている参加者も多かったようだが、学生スタッフによるガイド付きの見学ツアーは新鮮だった様子で、参加者からの学生スタッフへの質問も多かった。午後4時過ぎに散会となった。

愛媛大学における協議会と科学会は、以上のように盛会のうちに無事終了することができた。参加者をはじめとして両会関係者各位のご協力とご配慮に感謝申し上げる。



愛媛大学ミュージアムのみせ方・考え方

愛媛大学ミュージアム 准教授 徳田明仁

はじめに

平成 21 年 11 月 11 日に開館した愛媛大学ミュージアムは、本学農学部昆虫学研究室で収蔵していた完模式標本（ホロタイプ）の保管施設の設置の検討が発端であった。平成 8 年 1 月には国の文教施策の展開における学術研究の振興策として学術審議会報告書「ユニバーシティーミュージアムの設置についてー学術標本の収集、保存、活用の体制のあり方についてー」が出され、全国の大学で博物館を設置する機運が高まった。平成 16 年 4 月に国立大学が法人化されてから、本学でもミュージアムを自力で設置する検討が進んだ。

愛媛大学では博物館設置の目的を「ミュージアムは、愛媛大学の学術研究の営みと成果の公開及び地域の文化、社会教育等の発展に寄与すること」とし、平成 19 年 2 月にユニバーシティーミュージアム設置準備ワーキンググループを設置した。その後、平成 20 年 6 月にミュージアム空間構築計画を策定し、それに基づきより現実的な展示計画の構築が進められた。愛媛大学では、博物館づくりを専門とした民間の企業に可能な限り頼らない方針を掲げ、大学人自らの手で展示計画の具体的構築をめざすとした独自の博物館設立のあり方を模索し、今日の博物館の開館に至っている。本報告では、愛媛大学が博物館設置にあたり検討した博物館のあり方とそれに伴う展示のみせ方・考え方について述べるものである。

愛媛大学独自の博物館のあり方

そもそも展示とは、正に字の如く「展（ひら）いて示す」ことであり、また、ある意図（メッセージ）を伝えるために資料を計画的に配置しみせることである。展示を考えるにあたり、全ては“何を展示するのか”すなわち、“何を伝えるのか”といった情報の構築から始まる。あくまで展示を企てる企画者は、その基となるメッセージ（情報）の作者と考えるべきである。具体的に展示をつくるためには、空間

に情報を配置する行為において、その情報を具体的な表現へ置き換える能力が必要であり、そのためには高度な専門的知識が不可欠である。従って、通常は展示の内容（情報）を構築する企画者と、情報のある形へと具現化させ、空間への配置を計画する設計者との二人以上の専門性を有する者で構成する。博物館をつくることも、この展示をつくる考え方を基本に組織構造化するものであり、大学博物館づくりにおいても同様である。特に、愛媛大学のように多種多様な研究成果を展示として空間に置き換えるといった“情報の高度な具象化”を目的とした博物館の場合は、大学研究者以外にもより多くの多岐にわたる専門的知識をもつ人材が本来必要であり、結果として、博物館づくりを専門とした民間企業に一連の業務を委ねることが社会的に当然とみなされる。しかし、愛媛大学はこの手段とは異なった“方法論”を模索した。なぜならば、大学自身による博物館設立後の運営を視野に入れた持続可能な形での展示構築（サステイナブルミュージアム）の考えを有していたからである。つまり、愛媛大学はミュージアム設置の構想段階から、過去の資料を収集・保存し、研究・公開するこれまでの一般的な博物館の機能に加え、開館後も継続して研究成果の展示が可能となるよう一連の全ての業務を可能な限り大学人のみで行えないか検討したのである。この方針を現実化させるためにまず行ったことが、博物館構築の専門的知識を有した人材の確保であった。

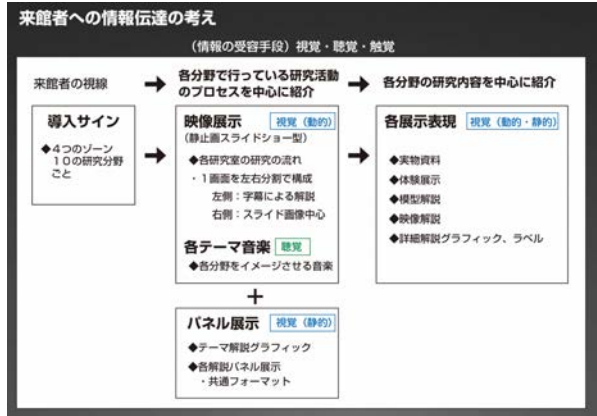
ミュージアムのみせ方・考え方

ミュージアムの展示構築にあたり掲げたのが低コスト・ハイパフォーマンスである。自力でミュージアム設立を掲げた愛媛大学だが、実状は設置のための予算も潤沢ではなかった。そのため、如何にして低コストでインパクトのある博物館がつけられるかが課題となり、このような状況のなか“手づくり感溢れるトライアルなミュージアム”というキーワードは生まれた。持続可能な博物館設立を具体化する第一歩が、情報の展示としてのみせ方を自分たちで検討することであった。そのため、様々な学術研究の成果をどのような考えのもとに

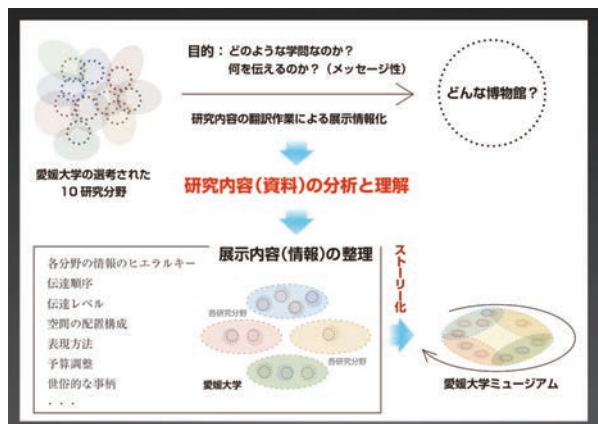
情報化し、展示に置き換えるのか、そのアイデアを思考することが重要となった。ここで生み出されるアイデアが、展示活動を踏まえた博物館運営に大きな影響を及ぼすことは予測できた。そしてその良し悪しが、来館される方々の博物館評価や将来的な期待値への還元に繋がる。試行錯誤をくり返し、博物館展示に対する既存の考え方を紐解き、低コスト・ハイパフォーマンスに繋げるアイデアとして、映像・グラフィックパネル・実物資料の3要素で展示表現を構成するに至った。この3要素は様々な研究分野への理解を促す共通の法則として辿り着いたものであった。まず、映像による解説では、各研究分野の研究活動のプロセスを中心に研究の流れや構成、ワークフローなどの内容を静止画スライドショー形式によって制作した。グラフィックによる解説では、ミュージアム展示の情報伝達の主軸として、ビジュアルデザインやサインデザインの統一性のみならず、パネル形状や寸法、文章構成、原稿量、写真・図版の取り扱い、ルビや文字の大きさ、更には文章表現に至るまで共通の規格化を図り、内容検討から製作完成に至る全てをミュージアムで製造できるようにした。実物資料用パーツやその他什器の設計には、展示資料保護を保ちながらも、可能な限り触れられる展示に取り組み、全ての造作物の設計を経済寸法による単体の家具として製作することで民生品との併用使用を可能とし、開館後の経済的負担を軽くできるよう取り組んでいる。全ての設計を自前で行い、外注製作が必要なもののみを家具として発注することで、現場工事の工期を短縮化し、経費の縮小に繋がった。このほかにも、ここにあげるアイデアを展示設計に投じ、愛媛大学ミュージアムの展示は完成に至ったのである。

「展示構築のアイデア」

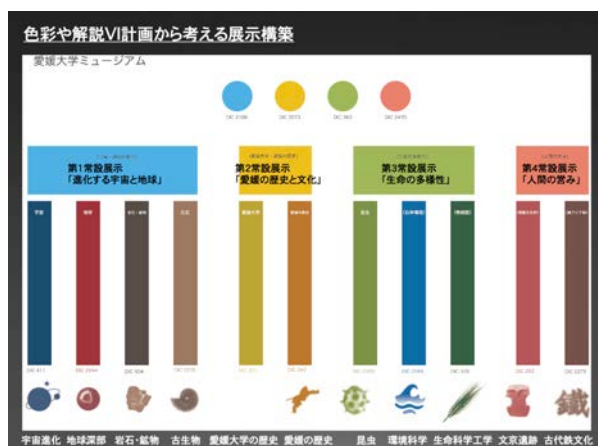
- ・ 情報伝達のプロセスや工夫
(愛媛大学ミュージアムの主となる骨格)
- ・ 最小単位である展示資料から考える展示
(本質的に持っている特徴)
- ・ 知覚的イメージから考える展示構築
(人々のニュートラルな感覚・共感性)
- ・ 色彩や解説 VI 計画から考える展示構築
(多様な視点からの分析)



情報伝達のプロセスや工夫 (解説資料)



最小単位である展示資料から考える展示 (解説資料)



色彩や解説 VI 計画から考える展示構築 (解説資料)

愛媛大学ミュージアムにおける学生スタッフ

愛媛大学ミュージアム 准教授 吉田 広

愛媛大学ミュージアムでは、開館以来、愛媛大学在学学生を大学有期契約職員として雇用してきた。ボランティアでなく、有償身分としたのは、ミュージアム運営において責任の一端を明確化するためである。2014年6月時点で15名のスタッフ（うち4名水槽管理・1名PCメンテナンス担当）を擁している。

採用

ポスター掲示や在学生向け情報掲示板を通じて、12月頃に次年度の募集を行い、書類（履歴書・成績表）審査と面接により、年度毎に必要な人数を確保している。倍率は2倍を超えることがない程度である。

研修

採用審査を経た後、次年度新規採用予定者に対し、前年度末の3月に、ミュージアムの設備や管理作業、そして来館者アテンダントに関する研修を行っている。まず半日程度、展示空間ほか管理・収蔵空間などを含めたミュージアム諸施設を巡り、実際の開館・閉館作業や館内清掃、空調・照明施設の維持管理ができるよう、ミュージアム施設に関するガイダンスを行う。その後、ミュージアムアテンダントに関するガイダンスを2日半か

けて実施する。最初の半日は、ミュージアム教員および現役学生スタッフによるアテンダントの受講である（写真1・2）。この来館者としてアテンダントを受けた経験と、その後数日間のミュージアムに関する自主学習を経て、いよいよ新規採用予定者にも、ミュージアムアテンダントを実際に行ってもらおう。新規採用予定者同士が来館者と解説者の役割を交替しながら行う相互実践である。1日かけて、ミュージアム全体の案内を繰り返し、さらにもう1日は、自らの得意分野、蘊蓄を語れる部分を作るという課題を与えて、相互実践を繰り返す。丸2日かけて、解説を聞きながらミュージアム展示空間を何周もし、かつそれぞれが得意分野を語り・聞くことで、ミュージアム展示についての一通りのアテンダント能力は、十分に獲得することができている。新年度からは、実際の来館者対応の経験を積んでいけばよい状態である。

勤務形態

以上のような研修を経た学生スタッフが、通常勤務に就いていく。休館火曜日を除く平日4日を午前と午後に分け、通常8名の学生スタッフが、授業に併せて前後期で担当を決め、休日は1日単位でローテーションを組み、結果各人毎月3日、18時間前後の勤務時間である。これに、団体来館者の事前予約などに応じて、1時間単位での勤務が急遽はいることも少なくない。大学内での勤務であり、このような不規則な要望にも比較的柔軟に対応できている。ちなみに時給は、松山市内の状



写真1 研修の様子1
(教員によるアテンダント受講)



写真2 研修の様子2
(学生スタッフによるアテンダント受講)

況に応じた愛媛大学が設定する学生雇用単価にあわせており、高いものではない。

業務内容

通常の勤務においては、受付職員とともに、開閉館作業を始めとした、展示施設（屋内・屋外）の清掃やメンテナンス等の維持管理にまずあたることになる。その上で、来館者からの要望に応じて、展示解説を行うようになってきた。しかし、このような待ちの姿勢では、アテンダント機会は決して多くなく、アテンダント機会のないままの勤務が続くことも生じつつあった。来館者も、その場で解説をわざわざお願いすることに対して躊躇があったはずである。ならばと、こちら側がより積極的な姿勢に転じ、学生スタッフから来館者に声をかけ、1回の勤務時間中に1回はアテンダントを行うよう、半ば義務的な指示を出した。それでもなお、団体予約に対するアテンダント以外の機会は多くない。今後の課題である。

教育効果

愛媛大学内では、無償の学生ボランティア活動がかなり活発に行われている。その中であって、ミュージアム学生スタッフとしての勤務は、有償の責任ある立場としての自覚を促している。とともに、教職員は、大学という教育現場での学生教育の一貫であるという

立場から、学生スタッフの管理・指導を行っている。何より、アテンダントを中心とした多様な来館者対応が大きな教育機会となっている。学芸員志望あるいは展示に関する専門分野専攻を契機に応募してくる学生スタッフには、専門分野をいかに平易に伝えるかといったプレゼンテーション能力の向上を錬磨する機会となっている。他方、コミュニケーション能力開発を意図して応募してくる学生スタッフも少なくない。大学キャンパス内で社会的経験を積むことのできる場として意識され、社会教育の場ともなっているのである。結果、学生スタッフが各研究を行っていく上で、さらには就職活動等において、ミュージアムでの経験は少なからぬ効果をあげていると自負している。

ミュージアムツアー

以上のような学生スタッフの活動として、大学博物館等協議会2日目昼には、学生スタッフによるミュージアムツアーを実施し、多くの方々に参加いただいた。3ヶ月弱の勤務経験で十分慣れていない中、かつ大学博物館関係者ばかりという状況は、学生スタッフにかなりの緊張感を強いたところである。参加者には不十分な面もあったことと思うが、学生スタッフが緊張感をもって臨んだあの機会こそが、大いなる教育効果をあげていたのである。参加いただいた方々に改めて御礼申し上げる。

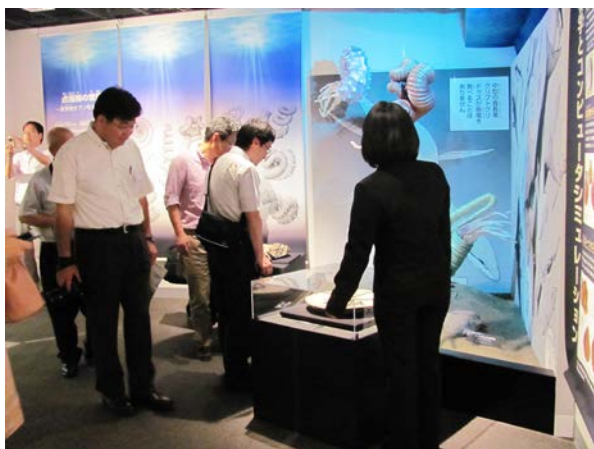


写真3 ミュージアムツアーの様子1
(大学博物館等協議会 2014年6月20日)



写真4 ミュージアムツアーの様子2
(大学博物館等協議会 2014年6月20日)

北海道大学総合博物館の展示の変遷 —展示というメディアを大学に根づかせる—

北海道大学総合博物館
副館長・教授 大原昌宏

シンポジウム「見せ方・見られ方」の趣旨に沿い、北海道大学総合博物館の展示が一般社会にどのように公開され、大学が展示室を持つことによってどのように変わってきたか、その変遷を簡単にまとめさせていただく。

2001 年 展示オープン

北大総合博物館は、1999 年に設置されたが、全教員が旧理学部本館（現総合博物館）へ移動となった 2000 年から本格的な館活動の始動となった。約 1 年半の展示準備を経て、北大創起 125 年を記念して 2001 年 10 月に展示オープンとなった。展示スペースは 900 平米であり、当初計画の 3,000 平米展示の約 3 分の 1 が出来上がった。

展示内容は「北大の歴史」「研究成果」であり、展示シナリオは学内の教員により構成された全学的な展示委員会が作製した。特に「成果」部分では、生命、環境、北方圏、科学技術の 4 テーマについて、学際的なワーキンググループを作り、学部横断的な内容のシナリオが作られた。展示業者は乃村工藝社が担当し、記念事業で十分な予算が確保されたこともあり、デザイナーと業者による洗練された展示が作製された。問題は、展示未経験の不慣れな大学人で委員会を構成したことと、1 年半という短い準備期間であったため、展示室によってはシナリオや展示品が不十分な箇所もできあがってしまった。

2005 年 展示の拡張 2 階展示室オープン

5 年を経て、展示スペースの拡張が館内および学内、市民から要求としてあげられた。総合博物館の建物は昭和 4 年築であり、老朽化対策と耐震の必要から、大規模改修が計画されていたが、改修の予算面の見込みがつかないことから、標本を未改修スペースに移動させるなどの措置をとることを決定し、要求

のあった展示の拡張として、2 階部分を展示室としてオープンさせた。展示スペースは 600 平米であり、2001 年製作の展示とあわせると 1,500 平米となり、当初計画の半分ができあがったことになる。

2001 年の展示作製と同様に全学から展示企画委員を選出し、委員会主導で展示構成、シナリオが作製された。全体の展示テーマは「ユニバーシティ・ラボ」であり、研究室で行われている研究の方法を紹介する展示を、宇宙、海洋、サステナブルキャンパス、考古収蔵について 4 室が作製された。前回は 125 周年記念事業で展示業者への依頼が可能であったが、2005 年の 2 階部分展示製作については部屋単位での予算上限を決め、限られた予算内で工夫をこらして作製するように担当委員にお願いをした。結果として一部屋 200 万円程度の制作費で、地元業者にパネル作製などを依頼するなど、手作り感のある展示ができあがった。

2007 年 展示スペースの充実 3 階展示室整備

2005 年以降は、常設展示整備費を大学本部から手当してもらい、毎年約 100 平米ずつの展示製作を行い、2007 年までに 3 階部分 330 平米の展示を整備した。3 階部分の展示テーマは「学術標本資料」であり、多くの標本を網羅的に陳列することで、学生が実物標本にふれる（観察する）場を供することを目的とした。6 展示室があり、動物骨格、昆虫・植物、地球惑星（岩石、鉱物、鉱床、化石）、ロウ製皮膚病模型が扱われている。

学術標本の展示が主体であるため、展示業者には依頼せず、展示具などは地元の家具屋に特注で作製するなどのオリジナリティの高い（手作りの）展示となった。現在まで、これ以降の大規模な常設展示の整備はなく、計約 1,900 平米の展示が一般に公開されている。

現在の展示

現在の展示コンセプトの構成は、1 階が「北大の歴史」「研究成果」、2 階が「研究方法」、3 階が「研究材料：学術標本資料」である。やや変則的な展示室の配置の部分もあるが、主要なコンセプトは維持されている。2007 年以



図 1. 北大歴史展示



図 2. 学術資料展示

降も、展示室の改善や入れ替えは毎年行われ、例えば、北大の歴史部分の「ロフティーアンビションの系譜」に、鈴木章先生ノーベル賞受賞記念展示（2011 年）が追加された。2 階部分には、GCOE の大型研究費を獲得した学内プロジェクトチームが、3 ヶ月ごとに研究成果を公開する展示（2009 - 2013 年）や、産学連携本部と共催の展示（2013 年）、図書館との共催の展示（2010 年）などが入れ替えとして新設された。大学博物館は、大学の広報の一翼を担うという認識から、上記の共催により展示室の追加がなされた。これらの活動から博物館展示室の利用の位置づけや認識が、学内ですこしずつ変化してきたように思われる。つまり、大学研究者に「博物館展示室を使って、研究紹介をしたい」という意識をもった人が増えてきたと思われる。

入館者数は、2001 年オープン時は年 16,000 人程であったが、最近では 12 万人（2014 年度）に達し、累計でも 100 万人に達した。



図 3. 産学連携展示

企画展示

企画展示の規模や回数は、年ごとに異なるが、最近では年 2 回の大型企画展示とその他の企画展示が平均 5 回ほど開催されている。

大型企画展示は、夏（予算 600 万円規模）と冬（300 万円）があり、それぞれ 2 ヶ月程度の期間開催され、通常 3 年程度の準備期間を経る。過去 4 年間の展示テーマは以下の通り：Lepidoptera（レピドプテラ）、空を舞う昆虫たち、チョウとガの世界（2011 夏）、クラーク博士と札幌の植物（2011 冬）、藻類が人類を救う（2012 夏）、エコで粋、自然に学ぶネイチャーテクノロジーとライフスタイル展（2012 冬）、巨大ワニと恐竜の世界（2013 夏）、ツインタイム・トラベル、イザベラバードの写真の世界（2013 冬）、学船、洋上のキャンパスおしよる丸（2014 夏）。

その他の企画展示は、基本的に予算は各 10 万円程であり、期間は 1 か月程度。持ち込みの共催展示や、学内の有志による展示が多い。例として、日本におけるスキーと北大スキー



図 4. 鈴木章ノーベル賞受賞記念展示



図5. 企画展示「Lepidoptera」展

部の100年(2012)、中谷宇吉郎没後50年記念(2012)、タイ国立科学博物館協定関連展示「タイからワニがやってきた」(2013)、フカシギの数え方(2013)、北のすみれ(2013)などの展示がある。

企画展示の開催は、季節別の入館者に大きく影響する。特に冬は来館が少なくなるため、企画展示により館全体の活性化を試みている。

その他の試み

展示スペースを利用した機能や工夫も、これまでの活動の中でなされている。

フロンティア基金の銘録パネル展示：北大へ寄付行為をいただいた個人・団体を顕彰して名前を展示させていただいている。多くの人の目に寄付行為が示されるため、さらなる寄付をもたらす効果を作り出している。

ミュージアムショップによる広報：2005年よりショップを導入しているが、グッズの開発を学生と共同で行うなど、大学博物館の独自の広報する媒体として機能している。ショップの販売員スタッフは学生アルバイト。

ウエルカムモニターの設置：博物館の入口に50インチのモニターを置き、企画展示の紹介などを常時流している。魅力的な映像が流されるため、目を引く展示物となっている。また館内案内や非常時のニュースの伝達などにも活用できる機能も持つ。

募金箱の設置：入館料は無料であるため、募金箱を置き、博物館活動費への寄付を募っている。年100万円ほどが集まっている。

知の交流コーナーでのセミナー：セミナーは展示室内の「知の交流コーナー」で月2回



図6. ミュージアムショップ

ほど開催される。企画展示との関連セミナーなど、展示をより効果的に理解してもらうための機能をもつ。

改修後の展示

2015年4月より、耐震改修工事のため展示スペースは休館となっている。2016年7月に再オープンの予定であるが、従来の学際的学部横断型展示から、学部ごとの個性が見える学部ネットワーク型展示へ、コンセプトを変更する予定である。またカフェを併設した「多目的ホール」の新規設置を予定しており、サイエンスカフェなどの開催会場として、また通常は展示物を見ながらゆっくりとくつろげる休憩スペースを目指している。

まとめ

以上、簡単ではあるが、北大総合博物館の展示の変遷を紹介させていただいた。「見せ方」については、展示業者に倣いながら、少ない予算の手作り感は否めないが、独自性をアピールしながら展示を作製してきたつもりである。博物館の展示が大学にあることで、学内の教員やスタッフにも「自分たちも展示を作る側：見せる側」となる仲間が増えてきたと思われる。「見られ方」については、まだ工夫が必要であるが、時代とともに演示具は著しく進歩しており、展示への考え方も変化している。柔軟に最新の考え方を取り入れる展示製作の姿勢を維持しながら、大学博物館らしい展示を模索していければと思う。

キャンパス内外に分散する施設を活用した大学ミュージアム活動の事例

島根大学ミュージアム 准教授 会下和宏

島根大学ミュージアムは、平成 18 年 4 月に発足した本学内の教育研究施設である。展示・収蔵スペースなどのハード施設は新たに整備せず、学内に点在する既存の小規模展示室をネットワーク化し、一層の活用を図っていく目的で組織のみを整える形によって出発した。

松江キャンパス内の展示スペースとしては、構内遺跡発掘調査成果などを展示した「ミュージアム本館」、山陰地域を中心とする考古資料を展示した「古代出雲文化資料調査室」、戦前の本学前身校の時代から収集されてきた動植物・鉱物標本を展示した「山陰地域資料展示室」、附属図書館展示室、ミニ植物園などがある。また、松江キャンパスから歩いて 15 分程の距離にある島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）が、平成 21 年秋に修復され、サテライトミュージアムとしてオープンしている。

以下では、こうした学内外に分散する施設を活用した大学ミュージアム運営の事例について、簡単に紹介したい。

キャンパス内外の施設を活用した諸活動

(1) キャンパスツアー

松江キャンパス内に点在する上記の各展示施設や校舎内をめぐるキャンパス・ウォーキングツアー。小中高校生・受験生・保護者・島根大学OB・市民一般にキャンパスの様子を理解してもらうことを目的としている。

キャンパスの敷居を低くして、地域から親しまれる大学作りを進めるための一環である。また受験生には、志望校について具体的に知ってもらい、入学後の大学生活をイメージしてもらうこともねらいとしている。

(2) ミュージアム市民講座

島根大学の様々な専門分野の教職員などが講師を務め、自身の教育研究内容について、分かりやすくリレー講義するもので、現在第 77 回まで実施した。生涯学習の一環として、



写真1. 第2回ミュージアム特別講座 in 大阪「古墳時代銅鏡の授受からみた倭王権と出雲・伯耆」(26. 12. 20)

本学の教育研究成果を市民一般や高校生などに広く理解してもらうことを目的としている。また、平成 25 年度には広島市内、平成 26 年度には大阪市内で「古代出雲」をテーマとした連続特別講座も開催した(写真1)。毎回、会場が満員となり、県外においても大変盛況だった。

(3) フィールド体験ツアー

豊かで多様性のある島根県内の自然・歴史・文化資源をフィールドミュージアムにみたくて、島根大学所有のバス・船を活用して現地に訪れる企画である。例えば、『出雲国風土記』にみられる遺跡・神社をバスで見学したり、海蝕洞窟遺跡を船で訪れたりするなどのプログラムを実施している。県内に埋もれた地域資源を再発見してもらうことを目的としている。

(4) 子どもミュージアム体験教室

島根大学がもつ標本資料・研究機器・機材を活用して、小中学生向けに様々なミュージアム体験をしてもらうミュージアム・スタート活動である(写真2)。児童・生徒たちに、島根大学でどんな研究をしているのか、大学内部の研究施設がどうなっているのかについて理解してもらうことで、将来的な島根大学進学への動機付けにしてもらうこともねらいとしている。

(5) 島根大学旧奥谷宿舎（サテライトミュージアム）での活動

島根大学旧奥谷宿舎（サテライトミュージアム）での活動



写真2. 子どもミュージアム体験教
「動かして学ぼう！太陽電池の不思議
～ラジコンカーを太陽電池で動かそう！～」(25. 5. 11)

アム) は、もともと1924(大正13)年11月竣工の旧制松江高等学校外国人教師(独語教師)官舎で、国登録有形文化財にも登録されている(写真3)。平成21年10月に修復工事を終え、サテライトミュージアムとしてオープン、平成26年10月で5周年を迎えた。

1階常設展示室では、「写真が語る島根大学の歴史と旧奥谷宿舎」を開催しているほか、1階多目的室を中心にミュージアムによる企画展示などを行っている。このほか、大学メセナの一環として、学内外団体との共催による様々なイベント(作品展・ミニ教室など)を開催し(写真4)、持続的に集客できる施設になるよう努めている。また、松江観光協会と連携することで、松江城下町の町歩き観光のルートにもなっている。

(6) 学生教育

従来、学芸員資格を取得するための科目の開講や博物館実習の段取りは、各学部が個別



写真4. 学外の画家による展示会(25. 9. 29～12. 1)



写真3. 島根大学旧奥谷宿舎(サテライトミュージアム)

的に実施していたが、平成21年度からミュージアムにおいて一元的に行っている。このうち学内実習は、学内の様々な展示室や収蔵資料を活用している。逆に、実習で学生が制作した展示パネルやワークシートを実際のミュージアム展示に再活用もしている。

今後の課題

以上の諸活動は、他大学の博物館でも既に活発に実施されているところであろう。本学ミュージアムでは、コア施設となる、一定のスペースをもった一元的展示室がないため、これまで、展示よりもこうした普及啓発・教育を重視した活動を行ってきた。展示施設というハードの整備は困難な課題であるが、今後とも実現に向けて粘り強く要望していきたい。

もう一つの方向性として、インターネットの活用があげられる。既に、多様な分野の標本類を一元的に検索できる「島根大学標本資料類データベース」や県内の遺跡を網羅的に収載した「島根県遺跡データベース」を運用しているところである。リアル展示が当面実現困難であれば、バーチャル空間でのミュージアム活動において、活路を見出していきたいと考えているところである。



山口大学における学術資産継承の取り組み—事業成果展『宝山の一角』開催中—

山口大学人文学部 准教授 尾崎千佳
山口大学埋蔵文化財資料館 助教 横山成己

第3回『宝山の一角』

平成27年2月28日から6月30日を会期として、埋蔵文化財資料館展示室にて第3回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展『宝山の一角』を開催している。

当展は、保存・修復・整理・デジタル化などの作業を実施した本学所蔵の各種貴重学術資料を学内外に広く公開し、学術研究成果の一端を社会にアピールすることを目的としており、平成24年度から継続して開催している。過去2回の開催では、学生や地域住民を中心に、1,000名を超える観覧者を迎え入れており、地域社会に対する本学の情報公開の場として認識されつつある。

本学には大学博物館などの共用展示施設が設置されていないことから、会場として埋蔵文化財資料館展示室を使用しているが、スペースが約35㎡と狭小であるため、展示は前・後期の2部構成としている。今回は前期展にて文書「山田顕義宛楫取素彦書翰」（図書館所蔵）、考古資料「見島ジーコンボ古墳群出土品」（埋蔵文化財資料館所蔵）、陶磁資料「河井寛次郎作品」（経済学部商品資料館所蔵）、岩石・鉱物資料「山口の地質と資源」（理学部所蔵）などを、後期展にて典籍『平家物語 長門本』（図書館所蔵）、骨格標本資料「ツキノワグマ骨格標本」（共同獣医学部所蔵）、美術資料「銅板レリーフ トリ 植木茂」（教育学部所蔵）、「世

界遺産ポトシ鉱山産鉱石」（工学部所蔵）などの公開を行っている。

“活動委員会”の発足

当展は、全学委員会である「山口大学学術資産継承事業委員会（以下“事業委員会”）」の主催によるものである。ここで委員会の設立契機と現在までの経過に触れておきたい。

事業委員会の創設は、平成18年に設置された「山口大学所蔵学術資産継承事業プロジェクト活動委員会（以下“活動委員会”）」にさかのぼる。前年度に学術資産の保存継承に関する概算要求が本学複数部局から提出されたことを受け、当時の学長、副学長から各部局の貴重学術資料の所蔵数についての問い合わせがあり、人文学部及び図書館の文書・典籍の視察が実施された。

折しも平成18年3月に出された文部科学省科学技術審議会学術分科会報告の「学術情報基盤の今後の在り方について（概要）」において、「今後の電子化を踏まえた大学図書館の強化すべき機能」として、「さまざまな学術情報資料の収集・保存・提供について、各大学の研究教育の特徴にあわせて、その充実につとめることが必要」とあり、その報告本文においても、貴重書等資料の電子化等の努力に対し、「文部科学省は、教育研究の情報基盤としての充実を図る観点から、これらの中で重要なものについて支援を行うことが求められる」とあることから、貴重資料把握のため活動委員会が設置されることとなった。

活動委員会の調査により、平成18年度中に「山口大学所属学術資産継承事業報告書」が作成され、付随して「山口大学所蔵学術資産リスト」と「調査票（個票）」が公開され（<http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/sisan.cgi>）、さら



展示会場（埋蔵文化財資料館）



展示の様様



平成 20 年度学内巡察の様様（教育学部）

に同年度より本学所蔵学術資産の継承に係る経費が学長裁量により配分されたことにより、資料管理部局の自助努力経費と合わせ、具体的な資料の保存処理、デジタル化事業等が実施されることとなった。

“検討委員会” への拡充

その後、平成 20 年 7 月には、学長の指示の下、大学の学術資産の継承と活用・公開について検討することを目的として、活動委員会を発展的に解消し「山口大学所蔵資産継承検討委員会（以下“検討委員会”）」が設置され、これとほぼ並行して第 2 期中期目標・中期計画中の大学博物館構想の可能性について具体的に検討する「山口大学学術資産継承検討委員会 WG」も設けられた。

WG は、平成 20 年度中に学内各部局に保管される学術資料の巡察を実施するとともに近隣大学博物館の視察も行い、同年度末に検討委員会に対し、「山口大学博物館を構想するには時期尚早」と答申する一方、第 2 期中期目標・中期計画期間を「山口大学博物館準備期間」と位置づけることを提案した。WG はさらに、本学の学術資産継承活動が中長期的な保存・修復目標を設定し得ていないこと、検討委員会委員が部局代表者の縛りから自由でないことが要因で、全学的な視野が欠如すると見られることから、検討委員会の中に「文書典籍」「博物・標本」「大学史料」の 3 部会を設置することも提案した。

専門部会の設置

平成 23 年度には、委員会組織の強化を図るため、検討委員会要項を検討委員会規則に格上げし、同時に実務組織として「文書・典籍・大学史料専門部会」と「博物・標本専門部会」が設置された。前者は部会内に文書 WG、典籍

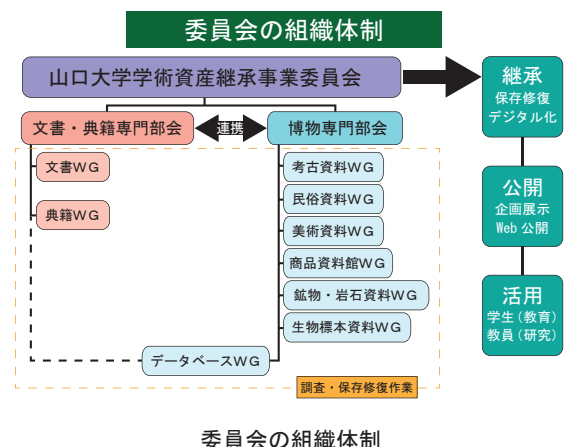
WG、大学史料 WG（大学史料 WG は平成 25 年度に廃止。部会名も文書・典籍専門部会に変更）が、後者は考古資料 WG、民俗資料 WG、美術資料 WG、商品資料館 WG、鉱物・岩石資料 WG、データベース WG が置かれ（平成 25 年度に生物標本 WG を設置。平成 27 年度に名称を博物専門部会に変更）、各 WG に専門の教職員が配された。また、学長裁量経費の配分による保存・修復事業の実施が、当該年度より経常経費化されることとなり、部局からの事業申請の他、両部会の推薦事業を実施できることとなったのは大きな変化と言える。

以降、各 WG を主体とする学術資産の保存・修復事業が継続して実施されることとなったが、事業の可視化を図るため、平成 23 年 11 月に学内向けの事業報告会を開催し、平成 24 年度からは学内のみならず地域社会に対する本学の責務を果たすため、事業成果展『宝山の一角』が開催されることとなった。

NEXT200 “事業委員会” の担う役割

すでに「検討」の域を脱したとの意見から、平成 27 年度より委員会名称が「山口大学学術資産継承事業委員会」に変更された。

本学は今年創基 200 周年を迎えたが、その公式 web には「先人達の「志」をこれからの 200 年に向かって繋ぎ」との文言が見られる。その一方で危機的状態にある学術資料・学術情報が無数にある現状が存在する。事業委員会は、真に全学委員会であることを自覚し、現状に目を背けることなく、学内における学術資産継承の拠点施設の拡充、具体的には大学図書館の施設・体制面の強化、大学博物館の設立を促進すべきと考える。



委員会の組織体制

大学博物館等協議会加盟館の 活動状況

東京藝術大学大学美術館

ボストン美術館×東京藝術大学 ダブル・インパクト 明治ニッポンの美

2015年4月4日(土)～5月17日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

ヘレン・シャルフベック—魂のまなざし

2015年6月2日(火)～7月26日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

「うらめしや～、冥途のみやげ」展

—全生庵・三遊亭圓朝 幽霊画コレクションを中心に—
2015年7月22日(水)～9月13日(日)
東京藝術大学大学美術館本館

関 出教授退任展(仮称)

2015年12月15日(火)～12月24日(木)(予定)
東京藝術大学大学美術館陳列館

島田 文雄教授退任展(仮称)

2015年12月15日(火)～12月24日(木)(予定)
東京藝術大学大学美術館陳列館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

2015年12月15日(火)～12月24日(木)
東京藝術大学大学美術館本館

尾登 誠一教授退任展(仮称)

2016年1月(会期未定)
東京藝術大学大学美術館陳列館



東京藝術大学大学美術館



名古屋大学博物館

箕浦 昇一教授退任展(仮称)

2016年1月(会期未定)
東京藝術大学大学美術館陳列館

名古屋大学博物館

特別展・企画展

関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡

2015年5月26日(火)～8月29日(土)
※本展の会期は2015年9月26日(土)まで延長します。

植物細胞壁のミクロの世界

2015年9月8日(火)～10月24日(土)

北の縄文人

2015年11月10日(火)～2016年1月23日(土)

ボタニカルアート展

2016年2月2日(火)～2月27日(土)

モンゴル展

2016年3月15日(火)～7月9日(土)

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

「京都・大学ミュージアム連携」連携展
“做う”から“創る”へ—京都高等工芸学校・
京都市立美術工芸学校の図案教育Ⅱ

館蔵オリンピックポスター展

2015年6月15日(月)～7月31日(金)

妖怪パラダイス！—現れる異形のものたち

2015年8月6日(木)～9月5日(土)

SD レビュー京都展

2015年9月28日(金)～10月12日(月)

増田友也展

2015年10月26日(月)～12月8日(火)

MUSEO ACADEMIAE 第17号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 2015年6月25日
大学博物館等協議会
編集 鹿児島大学総合研究博物館 099-285-8141
890-0065 鹿児島市都元 1-21-30